



第 46 回 (平成 22 年 2 月 10 日) 定例会の講演要旨

『旧手稲村(町)時代の概要と神社の話』

手稲神社宮司 山口雄之氏

旧手稲村(町)時代には手稲神社、上手稲神社、西野神社、星置神社、山口神仕、新川神社、稲穂神社、手稲神社奥宮、三菱鉱山神社、弥彦神社、三峯神社、藤白龍神社があった。
現在手稲区内には手稲神社、星置神社、山口神社が各地区の氏神様として鎮座しています。

手稲神社

未開の地に入植し厳冬と飢餓に耐え開拓に専念した住民は、当初から札幌神社(現北海道神宮)(明治 4 年鎮座)を参拝する事を常としていたが、農繁期、冬期の参拝は困難を極めたため、地元の小祠を建て遥拝するようになった。その創祀時期は明らかでないが、初めは大木の切株や棒杭等を依り代にした簡素なもので、のち明治 18 年には四坪程の小祠を建立し、明治 27 年 8 月 15 日の例祭日に札幌神社の白野宮司が斎主となって執行されたとの記録があり、この頃には既に村の鎮守として祀られていた事が窺える。但し、当時はまだ無願神社であったため、開拓使が札幌近郊神社に勧めた、札幌神社遥拝所設置につらなり、明治 29 年 12 月 26 日に札幌神社正式遥拝所設立を出願し、翌 30 年 9 月 4 日認可を受けて、その後鎮座地名をとり、軽川遥拝所と称した。村の人口も多くなり、公認神社の設立が熱望されるようになり、明治 31 年に三坪五合の増築が行われ、遥拝所を神社に引直しの儀を出願し、翌 32 年 5 月 18 日創立を許可され、手稲神社と公称した。



神社創立より 5 年、明治 37 年には公認神社として、是非「村社」に昇格したいとの氏子の総意により、初代社掌土井氏をはじめ総代連名にて請願書を以って北海道庁へ出願する。そして昇格出願から十数年を経て、大正 6 年 8 月 23 日下手稲村の鎮守社として「村社」に昇格した。今日の基盤となる様相を整えたのは昭和 9 年の事で、社殿「28 坪」と社務所「29 坪」の御造営が行われた。その後境内整備も進み、次は「郷社」に昇格陳情の議おこり、昭和 14 年 3 月 15 日先代宮司と総代七名の連名にて出願する。

昭和 16 年 4 月 1 日付けにて「郷社」昇格を認可された。そして 6 月 28 日には神饌幣帛料共進神社に指定された。昭和 20 年 8 月 15 日終戦を迎え、宗教法人令によって全国の神社は「神社本庁」の管轄下となり、手稲神社も昭和 21 年 8 月 1 日付けにて、その所属神社となった。そして昭和 28 年 2 月 24 日から「宗教法人手稲神社」として新たな歩みを始めた。昭和 42 年に手稲町が札幌市と合併編入されると、今後益々の発展を期待され、手稲の鎮守様として一層の尊厳護持が望まれた。昭和 45 年 12 月 14 日役員会により、社殿改修と社務所の新築が決定され、昭和 49 年 6 月 30 日には落成奉告祭ならびに祝賀会が執り行われた。

平成元年手稲区が誕生し札幌のベッドタウン、また自然豊かな文教地区として街の様子も大きく変

貌し、例大祭もこうした都市化やメディアの発達により祭りも大きく変わり神賑行事も多彩な内容となっている。

特に平成5年から加わった江戸神輿渡御は今までの神輿渡御とは趣を異にしており、静に対して動、全道各地より毎年200数拾名の方々が参加して戴き祭りを盛り上げて下さいます。

平成11年には公称より数えて百年を迎える事となり、その記念事業として「社務所並びに演舞場」新築工事を主体事業として行うと共に境内整備事業も行った。また平成21年には御鎮座110年を迎え、社殿改築より35年経て、老朽化と共に耐震補強などの護持運営に向けて、銅板屋根葺替を始めとする、御社殿改修工事を行って現在に至っています。御祭神は七柱のうち（主祭神）は開拓三神・大国魂神（オオクニタマノカミ、万物を成生化育し、北海道の生きとし生ける一切の生命の守護神としての霊神）・大那牟遲神（オオナムチノカミ、国土経営開拓の指導神）・少彦名神（スクナヒコナノカミ、医薬、酒造りの祖神）・相殿神 天照坐皇大神・豊受姫大神・天満大神・倉稲魂神（ウガタマノカミ）。

星置神社

明治20年頃、星置153番地（現在の星置1条7丁目18）に小祠を建立し郷里より捧持した御祭神を奉斎し、村落の安泰と発展を祈願いたしました。明治45年に現在地（星置南1丁目8-1）を得て星置開拓村30年にあたる大正2年9月に開村記念碑と共に軟石造りの小社を建立し、神霊を移遷して祭事を行ってきました。

昭和48年9月に現在の社殿を御造営し、昭和54年宗教法人星置神社となりました。

御祭神は天照大御神・豊受大神・大己貴神。

山口神社

明治18年、山口県より移住者が当地に伊勢神宮の遥拝所を設けたのが始まりである。明治35年9月17日、山口神社として創立の許可を受け、昭和18年6月28日村社昇格、昭和43年現在社殿及び社務所を新築現在に至る。御祭神は天照大神・豊受大神。

上手稲神社

明治9年仙台藩よりの開拓者が守護神として須佐之男命を祭神として小祠を建立し、上手稲神社と称した。現在の宮の沢2条4丁目375の5、明治31年9月23日天照皇大神を合祀する。然るに明治42年原因不明の失火により小祠全焼した。その後、宮の沢14番地土地を寄進され明治42年10月再建された。

昭和28年宗教法人となる。同40年、現在地に遷座し現在に至る。御祭神は天照大神・須左之男命。

西野神社

明治18年、故郷から産土神を抱いて渡道した五戸の入植者達によって開拓の守護神として三柱を奉斎する。西野地域の中心とおぼしき所に建立したのが西野神社の起こりとされる。明治32年、右股、左股、広島各集落の小祠を合祀して社号を西野神社とし、大正5年に社殿が新築される。

昭和28年3月、西野神社の宗教法人設立の手続きを完了。昭和42年、西野神社造営。昭和58年、西野神社創祀百周年記念事業の一環として、大規模な増改築が行われ、現在に至っている。

御祭神は豊玉姫命（安産神）・鵜茅葺不合命（安産、育児の神）・品陀和気命（読みホンダワケノミコト）応神天皇、八幡大神。

手稲神社奥宮

昭和22年10月、手稲山山頂に手稲神社奥宮が建立された。昭和32年テレビ塔完成記念として、

北海道放送(株)から新しい奥宮が奉納された。昭和 55 年石室風の奥宮を建立し現在に至る。

御祭神は手稲神社御分霊・弥彦大神・三峯大神・丸徳稻荷・伏見稻荷大神・龍神大神。

藤白龍社

終戦間もないころ藤棚の近くに栗の古木があり日本石油備蓄タンク爆撃の爆風で上部が吹き飛ばされ、その中に二匹の白蛇が棲んでいた。ある秋祭りの日に一匹が外に出て子供に見つかり石を投げつけられ絶命。近くの畠に捨てられていたが古木の近くに埋葬、その後この上に小祠を建て、藤白龍社として崇め、平成 8 年稲穂石川家より社殿を奉戴し再興され、多くの参拝社がお参りしている。

新川神社

明治 32～3 年頃前田 10 条 11 丁目辺りに移転し社殿には旧前田農場内に残る大正天皇東宮殿下時代に行啓された際の休憩所を移設使用した。昭和 48 年の手稲神社の御造営に併せて合祀する。

社殿はじめ牛馬塔、鳥居、灯籠も移設され殊に旧社殿は神輿殿として使用されている。

小樽内川稲荷神社

現在の石狩湾新港内、旧小樽内川地区に鎮座し、明治 38 年小祠を建立、海風や浸食により移転、改築を繰り返しながら石狩湾新港の開発に伴い地区が包含される事となり、昭和 47 年 10 月手稲神社に合祀する。

弥彦神社

弥彦山に有った(現在の手稲本町 2 条 4 丁目)日本石油の守護神、越後の国内で一番格式が高かった。御祭神 = 天香久山神(アメノカゴヤマノミコト) 明治時代の近代化にともなって新潟各地から石油が産出され、油井を掘る前に関係者が弥彦神社に参詣した。

三峯神社

弥彦神社の近くで、今の中央幼稚園、手稲消防署の近くにあった。現在は弥彦神社の祭神と共に奥宮に合祀されている。

三菱手稲鉾山、山神社

昭和 14 年頃の祭りの写真があるが、その数年前から行われていた事と思われる。紀元 2600 年 7 月新築され、階段も 120 段ぐらいありました。黄金町、白金町、宮町、滝見町、栄町があり、当時宮町が国道からも山の方からも中央に位置していた。クラブ、映画館、星置小学校(現西小学校)、水道の設備もあった。

栄町のクラブには「立派な天井画」が有り幼児期には怖い記憶として残っており、映画館も立派であった。

神社参拝の時の心得

参拝の折には真中は神様の通りみちであり人は左か右をしづかに通らましよう。

作法は、二礼二拍手一礼です。

どんど焼き

納める事が出来るものは御神札・御守・御神矢・神棚・しめ縄しめ飾り松飾り・おみくじなど神社に関わるもの。

[文責：立花顕次]

「石狩の農業盛衰記」

石狩市花川北 釣本峰雄氏

寄席の文化にふれて感謝

私どもの研究会開始以来初の講談調で伝えて下さった「石狩農業」、正に寄席の演芸に魅入る感じでした。見事に徳川家康の江戸幕府から始まり、やがて蝦夷地にも和人が「内地」から移り住み、北へ北へと足を伸ばし、石狩川の河口に至った史実を軽快な弁舌で語ってくれました。まるでミニコミ紙「おしゃひろ」の新聞記者として取材して回る姿とは似ても似つかぬ話芸に長けた講釈師そのものでした、芸とはここまで人を代えものかと恐れ入りました。感激の一瞬でした。

石狩農業資料、よくまとめてくれました

「石狩の農業盛衰記」と題した長文のレポートは、幕末から今日の石狩市誕生への歴史物語です。その節々のキーポイントにふれながら、戦後の本格的造田事業、凍てつく真冬も稲穂を夢見ての用水掘り突貫工事、血と汗のたまもので、昭和 38 年には広大な無用の砂地が 3383 町歩の美田に変貌した事実を知らせてくれました。(語りも最高潮でした)この後については、目まぐるしく変わる減反政策、宅地化、石狩湾新港等々の施策、ご存知の通りです。

大事にこの資料を学習させて頂きましょう。

釣本家入植記と父の生き様紹介

釣本家は手稲山口に山口県から移住して来たのと同じように、明治 18 年岩国から樽川に集団移住



して来たのです。峰雄会員は 5 代目であり、先代父親像も口にされました。実直な青年が戦地に赴き、戦争という名のもとに外地での行為を父から聞かされていたようです。重い語りでした。復員後のお父さんは農業一筋に樽川村の発展に尽くされ、息子さん達の教育にも熱心でした。会員の思い出に「学校から帰ったら仕事も手伝いなさい」との言葉の裏に、息子には進学させようとする親の想いが読み取れそうです。だからこそ会員は、父の言葉を背負いながら、農とは無縁の道を歩み、今もって野菜畑にも足が向かない起因はこの辺でしょう。勝手な推測ご勘弁下さい。

釣本家の文化財、手稲郷土史研の貴重な財産として保存中

私たちの会が発足時頃、ご両親も亡くなられ、樽川の大地を耕してきた大きな倉庫一杯の農機具類を手放す羽目に……。小さな小箱の一つ一つにもラベルをはり、土を愛し、道具を大事にされてきた生き様に頭の下がる思いでした。樽川と手稲は、釣本家の始祖を知るまでもなく昔から深い地縁続き、ある面共同社会を形成してきた間柄。この処分寸前の歴史遺産を残したいとの一心で預かり、現在土木センター収蔵庫に保存されています。いつの日にか陽の目を見たいものです。 [文責：茂内]

= = = = = = = = = =

お悔やみ

当会の会員で、監事としてまたその他多方面にわたり、会のためにお世話いただいております加藤利昭氏が、2 月 12 日に急逝されました。10 日の例会で、お元気な姿をお見かけした直後の訃報に接し驚きました。

会のためにご尽力いただいたことに感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

